巻頭言

広島大学大学院
医歯薬保健学研究院
（前・生理学研究所統合生理研究系感覚運動調節研究部門）
大鶴　直史

研究者の入口に立って

最近，理学療法士の方から「研究者になるにはどうしたら良いか」といった相談を受けることが多くあります．筆者が，7年前に修士課程に入学した頃は，大学院進学という選択をする人は少数派だったと思います．しかし，現在では，筆者の知りうる限りでも多くの理学療法士が大学院に進学し，そのなかには一流国際誌に論文を発表されている人もいます．

筆者も大学卒業後に，臨床に出るか大学院に進むか思い悩んだ時期がありました．その時期の臨床実習で，脳卒中後に激しい痛みを訴える患者さんにお会いしました．足部を床につけるだけで叫ぶほどの痛みを訴える患者さんでした．その時は知識も無く，ただ狼狽するばかりで何もできなかったことを今も鮮明に覚えています．そのような患者さんとの出会いがあり，大学院で疼痛に関する研究がしたいと思い進学を致しました．

修士課程では，入学はしたものの英論文を読むことさえもままならず，自分の頭の中の妄想と研究デザインを組み立てることのギャップを埋める作業に大変苦労しました．安藤啓司教授に，筆者の稚拙な研究計画を根気強くご指導頂き修士論文をまとめた頃，脳機能イメージングに興味を抱きました．そこで，痛みのイメージング分野で世界的に有名な生理学研究所の柿木隆介教授の門をたたき，博士課程に進学させて頂くことになりました．生理学研究所は，世界有数の研究者が集まり，分子レベルから個体レベルまで主として脳の働きを研究している機関です．当然のように筆者の知識不足を痛感させられましたが，医師，体育，工学，心理学など多岐にわたる諸先生および先輩方に支えられ，様々な視点から研究を考えることの大切さを学ばせて頂きました．このような経験は，今後重要な財産になると確信しています．

現在，科学的根拠に基づいたリハビリテーションというものが求められています．理学療法を理学療法「学」という学問として構築するには，広く深い研究の積み重ねが必要です．筆者のこれまでの研究が，直接，疼痛患者さんに役立つ訳ではありません．しかし，基礎的な知識の理解や研究データを蓄えることは，現在の臨床にも活かせ，いつの日か痛みの克服の一助になるかも知れません．今から10年後，20年後に現在のリハビリテーションからは考えられなかったような新しい世界が広がっていることを願っています．そして自分もその場に立てているように微力ながら研究を続けていきたいと思います．5月より広島大学大学院に移り，新たな気持ちで教育と研究を進めて行きます．